

五・千早城の戦い 錦絵に見る楠正成の奇計

しろはく古地図と城の博物館富原文庫 代表 富原 道晴

戦国時代の武将達は太平記を読み、楠正成の戦術兵法に憧憬の念を抱いた。時は元弘3年(1333年)、今から約700年前、あの桶狭間からでも200年以上前の出来事である。何せ、わずか1,200ほどの兵、千早籠城ではわずか300そこそこで、あの関東鎌倉幕府の80万とも、200万ともいわれる大軍に囲まれ、六波羅探題陥落による鎌倉軍の撤退まで実に100日以上、知略を駆使して闘ったのである。2月27日から、閏2月を含めて5月10日まで、さらに5月22日、鎌倉は陥落し、北条氏は滅亡、鎌倉幕府は崩壊した。この千早籠城戦は下剋上の時代、戦国武将に強い印象を与え、後に江戸時代には楠流兵法として、甲州流、越後流などととも栄えた。

今回取り上げるのは、おそらくまとめて見る機会のない幕末錦絵に見る千早城の戦いである。ここには江戸の人々の感性で描かれた楠正成の活躍が、太平記を元にビジュアル表現されている。今でこそ、写真もあり、復元図も描かれ、見る機会の多い歴史であるが、幕末の錦絵では武者絵、合戦絵として、多くの庶民に愛された。高松城水攻めや伊賀上野仇討、川中島の戦いと歴史ドラマに心躍る思いであった。

古いところでは勝川春章の赤坂合戦が1790年頃と推定されるが、合戦錦絵の殆どは極印の分析により、幕末、弘化4年(1848年)から慶応元年(1865年)のわずか17年に集中している。玉蘭斎貞秀、一鵬斎芳藤、一壽斎芳員、一松斎芳宗、一猛斎芳虎等国貞、国芳の門人たち、歌川派の絵師の活躍である。勿論、明治にも合戦錦絵は描かれるが、武士の時代の感性に欠けるところがあり、安い顔料に支配されて、上品な美しさは得られない。ただ、幕末の感性を以てしても、中世城郭、土塁の城は近世の白亜の城壁、櫓として描かれてしまう。一般にみんなの心の城とは今も変わらず、あの白亜の姫路城であり、各地の城下町に聳える天守であった。

太平記、楠正成の奇略を錦絵に見る。

図1は偽装の城壁により、取りついた兵を壁ごと落とし大敗させた様子。釣堀の計 貞秀 楠正成河内国千早城鎌倉勢惣責寄手破軍大合戦部分。

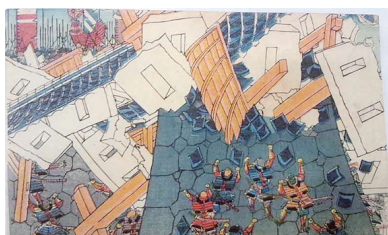


図1

図2は巨大な栈橋を造り、谷を越えて城壁を渡し乗り込も

うとしたが、油と松明により猛火に包まれ、谷底に転落した様子。雲梯の計 芳員 楠正成七百余騎栈橋を焼く数十万の敵を微塵に打ちなし、無双の良将部分。



図2

図3は柄杓で城壁に登る敵兵に、熱湯、糞尿を浴びせ、鎌倉軍を悩ませる様子。熱湯の計 芳虎 楠正成、赤阪の城に楯籠り、討手を引き付け熱湯を浴びせ大軍を悩ませる部分。

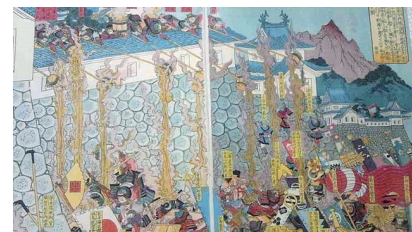


図3

図4は城壁から巨大な岩石を落とす。どうして持ち上げたのか、荒唐無稽な、岩落しの計 貞秀 楠正成千剣破城防戦図部分。



図4

図5は関東の大軍が攻めあぐね、飲料水止めの水攻め、兵糧攻めを仕掛けたが、これは水攻めを楠側の関東軍への水攻めと考えたか。水攻めの計 芳虎 楠正成千剣破城防戦図部分。

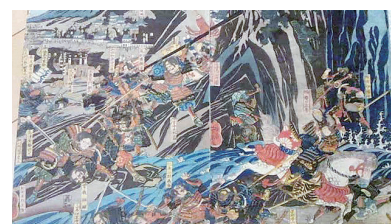


図5

以上、錦絵から楠正成の太平記の逸話を江戸時代の目で見えてきた。錦絵は当時の新聞、瓦版、写真、チラシである。今日の高額な美術品ではない。楽しい庶民的なメディアである。清州城修築絵図をタイトルだけ千早城普請の図にしてみたり、元治元年の錦絵を作者だけ削って、明治13年(1880年)に別の作者で再刊したり、今の倫理観では理解できないものもある。逆に、現代人に理解できない感性が錦絵にある。